Osaka University Knowledge Archive

Title	ワカンダとコロニアリズムの関係 : マーベル映画『ブラックパンサー』より
Author(s)	舞, さつき
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 43-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72732
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ワカンダとコロニアリズムの関係

――マーベル映画『ブラックパンサー』より――

舞　さ つ き

１．はじめに

マーベル・シネマティック・ユニバースの 18 本目にあたる映画、『ブラックパンサー』(2018)は、初のアフリカ系アメリカ人監督による、初のアフリカ系スーパーヒーローが主役の映画である。主役だけでなく、キャストや製作陣の多くがアフリカ系で占められており、ハリウッドの大予算映画としては今までにない構成で製作された映画であったが、北米での興行収入は『スター・ウォーズ／フォースの覚醒』 (2015)、『アバター』 (2009)につづく歴代 3 位、全世界でも歴代 9 位を記録[1]し、さらにアメリカンコミック原作のスーパーヒーロー映画として初めてアカデミー賞作品賞にノミネートされるほどの社会現象となった。同作は、作品賞を含む 7 つの部門[2]でノミネートされ、美術賞をハナー・ビーチラー、衣装デザイン賞をルース・E・カーター、作曲賞をルドウィグ・ゴランソンが受賞した。

Délice Williams は『ブラックパンサー』が大ヒットを収めたのは、“the seductive depiction of an Africa unburdened by colonialism and slavery; the celebration of Black family and Black love; and the portraits of smart, powerful, passionate women.” (27)だと理由を挙げている。本稿では、これらの理由の中でも特に、“the seductive depiction of an Africa unburdened by colonialism and slavery”という点に焦点を当て、マーベル映画『ブラックパンサー』における植民地主義や奴隷制の描写について考察していきたい。

２－１．監督ライアン・クーグラー

『ブラックパンサー』は 32 歳で新進気鋭の監督、ライアン・クーグラーによって撮影された。彼は 2013 年に『フルートベール駅で』で長編映画デビューし、サンダンス映画祭で絶賛され、第 66 回カンヌ国際映画祭ある視点部門の第一作品賞を受賞した。同作は彼の出生地でもあるアメリカカリフォルニア州オークランドの、フルートベール駅で 2008 年に起こった、黒人男性が白人の警察官によって無実の罪で射殺された実際の事件を基に作成された映画である。次作の『クリード　チャンプを継ぐ男』 (2015)は、『ロッキー』シリーズ

[1] 2019 年 4 月現在
[2] 作品賞、作曲賞、録音賞、歌曲賞、音響編集賞、衣装デザイン賞、美術賞

のスピンオフで、アポロ・クリードの非嫡出子、アドニス・クリードを主人公とした映画である。本稿で取り上げる『ブラックパンサー』は彼の第三作目にあたる。

２－２．ブラックパンサー

ブラックパンサーは、1966 年にマーベルコミック初の黒人スーパーヒーローとしてアメリカンコミック『ファンタスティックフォー』に登場したキャラクターである。これまでもコミックにアフリカ系のキャラクターは存在していたが、黒人のスーパーヒーローはブラックパンサーが始めてであった。映画も同様で、これまでのマーベル・シネマティック・ユニバースに登場してきたスーパーヒーローは大多数が白人男性で、アフリカ系のキャラクターは主役ではなく「相棒」の立ち位置で描かれてきた。そんな中、映画『ブラックパンサー』は、主要キャストのほとんどがアフリカ系、そして物語の舞台がアフリカの架空の国という作品だ。以下は、映画『ブラックパンサー』のあらすじである。

何世紀も前に、5 つのアフリカの部族が、宇宙で生まれた金属ヴィブラニウムを得るために戦争を行った。ある戦士はパンサーの女神バーストに導かれ、その金属によって突然変異した神秘のハーブを摂取し、超人的な筋力、スピード、直観力を得た。そして彼は最初のワカンダの守護者ブラックパンサーとなり、部族を統一してワカンダの国を形成する。アフリカの国家ワカンダは、巨大なパワーを秘める鉱石ヴィブラニウムの産地であり、その鉱石が他国に渡らないよう、周辺から隔離されて独自の発展を遂げてきた。国王であり、先代ブラックパンサーでもある父ティ・チャカを亡くしたティ・チャラは、ワカンダ新国王の即位の儀式に臨み、挑戦者と戦って勝利し、国の守護者であるブラックパンサーとしてのパワーを与えられる。しかし突然の父の死、国の未来など、ティ・チャラは葛藤を続けていた。映画『ブラックパンサー』は新国王であり、ワカンダの守護神ブラックパンサーを継いだティ・チャラが迎えることになるさまざまな試練を描いた映画である。

２－３．ワカンダ

『ブラックパンサー』の主な舞台はアフリカ架空の文明国「ワカンダ」である。ワカンダは、東アフリカのイレミ・トライアングルとして知られる国境地域の辺り、ケニア、エチオピア、ウガンダ、南スーダンに隣接する架空の地点となっている。希少な金属「ヴィブラニウム」の唯一の産出国であるが、他国からの侵略を恐れ、表向きは貧しく、資源も産業も何もない農業国のフリをしている。しかし、実はヴィブラニ

図 1 [00:15:30]

ウムのおかげで最先端の科学技術や高度な医療技術が発達し、非常に高度な文明を有している。

ワカンダはゴールデン族（王族）、リバー族（川族）、ボーダー族（国境）、マーチャント族（商人）、マイニング族（鉱山）、ジャバリ族 6 つの部族で構成されており、民族衣装や装飾などはマサイ族やスリ族、ドゴン族、ンデベレ族などといったアフリカ大陸全土のさまざまな民族を視野に入れデザインされている（図 1 参照）。ワカンダで使われる言語は南アフリカ共和国のコサ語、または英語で、劇中のワカンダ人が英語を話す際は、アフリカのさまざまな地域訛りの英語を話す。アフリカ訛りの英語を話すのは、ワカンダが一度も植民地化されたことがないからである。

ワカンダはこれまで植民地化されたことがないどころか、徹底的に自国の秘密を守るために、他国の人間をその地に踏み入れさせることもなかった。しかし、ワカンダ人をかばって大怪我を負った白人男性を治療するために、主人公ティ・チャラは彼をワカンダへ連れて帰ることを決断する。白人男性の治療を行った少女シュリは、目覚めた彼に突然声をかけられ、“Don’t scare me like that, colonizer!” [1:09:22]と言うが、ワカンダは一度も他国から侵略や植民地化されたことはないため、ワカンダにおいて白人は“colonizer”とは言えない。また、ヴィブラニウム製の武器を売り飛ばそうとする白人の武器商人を追っている際中に、銃で攻撃されたワカンダ人女性オコエが、“Guns. So primitive!” [0:50:30]と言う場面もある。ワカンダにおいては、植民地主義の文明人／野蛮人や、中心／周辺などといった二項対立関係は壊されている。

ワカンダ以外の近接のアフリカ大陸は現実世界と同じく、混乱と窮乏に陥っている。ワカンダを守るため、前国王は世界中にスパイを送り、社会情勢を探っている。映画序盤で、主人公ティ・チャラは前王ティ・チャカが亡くなったため、スパイのうちの一人を国に呼び戻そうとナイジェリアのサンビサ森林に現れる。そこには図 2 のように、多数の若い女性達を誘拐拉致し、移送中の武装集団がいる。ワカンダは、植民地化されずにいたアフリカ大陸のユートピア的な国ではあるが、周りのアフリカ大陸の状況を見てみぬふりをし、自国を守り続けてきた国でもあるのだ。

図 2 [00:11:30]

ワカンダという国の中に関して言えば、確かに“the seductive depiction of an Africa unburdened by colonialism and slavery”ではあるが、『ブラックパンサー』全体で言うと、植民地主義や奴隷制といった負の遺産がまったく描かれていないわけではない。それらを担っ

ているのが、主人公ティ・チャラのヴィラン（敵役）にあたるエリック・キルモンガーの存在である。彼については次章で詳しく見ていきたい。

３．unburdened と burdened な存在

映画『ブラックパンサー』の冒頭は、ワカンダではなく、1992 年のオークランドから始まる。オークランドは前述したとおり監督ライアン・クーグラーの出生地であり、デビュー作でもここを舞台としているため、彼にとって非常に重要な場所であることは間違いないだろう。また、「1992 年」という時代も重要であることは池田[3]が指摘している。

> 映画『ブラックパンサー』が 1992 年のカリフォルニア州オークランドから始まることは象徴的だ。92 年はロドニー・キング事件をきっかけにした白人と黒人の対立から始まったロサンゼルス暴動が起こった年であり、サンフランシスコ湾に面したオークランドは 66 年 10 月に黒人解放を目指す急進的なブラックパンサー党が生まれた場所でもあるからだ（コミックのブラックパンサーと、このブラックパンサー党とは直接の関係はない。コミックのほうが社会に登場したのは数カ月早かった。創作もニューヨーク在住のユダヤ人であるスタン・リーとジャック・カービーによってなされた。偶然の一致であるが、ともに 60 年代という時代の息吹を受けていたことは間違いない）。

この冒頭の舞台となるオークランドで生まれたのが、ワカンダの前王ティ・チャカの弟ウンジョブの息子で、主人公ティ・チャラの従兄弟にあたる、エリック・キルモンガー・スティーヴンス（ワカンダ名：ウンジャダカ）だ。彼はワカンダ人の父とアメリカ人の母の間に生まれ、アメリカで育ったため、ワカンダの地を目にしたことはない。彼の父ウンジョブは、ワカンダ国外に住む黒人たちが苦しんでいる状況を放っておけず、祖国を裏切り、彼らにヴィブラニウムの武器を提供することで、白人たちへ対抗できる力をつけさせようとする。しかし、それに気づいた前王は、ワカンダの伝統的な鎖国政策を優先し、国を守るため、ウンジョブを処刑する。キルモンガーはその父の意志を継ぎ、ワカンダの資源と技術を開放し、アフリカ系の同胞たちに体制を覆す力を与えようと目論んでいる。

場面は 1992 年から現在に移り、次に成長したキルモンガーが現れるのは、イギリス、ロンドンの博物館“Museum of Great Britain”である。そこで彼は図 3 のようにアフリカの展示品の前に立ち、専門家のイギリス人女性に展示されている工芸品についてひとつひとつどこのものか尋ねていく。そしてある工芸品の前で、これはワカンダのものだから返してもらおう、とキルモンガーは言う。「これは売り物ではありません」、と言う女性に対し、キルモンガーは次のように返す。

---

[3] 池田純一「映画『ブラックパンサー』は、「アフロ・フューチャリズム」を人類の希望に転じた」https://wired.jp/2018/03/18/black-panther-review-ikeda/

Scene: [00:16:36-00:16:42]

How do you think your ancestors got these?

You think they paid a fair price?

Or did they take it, like they took everything else?

この博物館"Museum of Great Britain"は名称こそ変えられているが、"British Museum/大英博物館"をベースにしていると考えられる。大英博物館は、旧植民地などからの略奪品が多い博物館としても有名であり、『ブラックパンサー』で出てくるこの展示物も、その略奪品の一つであることをキルモンガーは示唆している。ワカンダおよび主人公ティ・チャラが "unburdened by colonialism and slavery"であるのに対し、本映画では主人公の敵役にあたるキルモンガーは"colonialism"や"slavery"を誰よりも負っている存在である。それは以下のティ・チャラとキルモンガーの対峙の台詞からもよく分かる。

図 3 [00:15:30]

Scene: [01:14:22-01:15:09][4]

Killmonger: Y'all sittin' up here comfortable. Must feel good. It's about <u>two billion people all over the world that looks like us. But their lives are a lot harder</u>. Wakanda has the tools to liberate 'em all.

T'Chall: And what tools are those?

Killmonger: Vibranium. Your weapons.

T'Chall: Our weapons will not be used to wage war on the world. It is not our way to be judge, jury and executioner… <u>for people who are not our own.</u>

Killmonger: Not your own? <u>But didn't life start right here on this continent?</u> So ain't all people your people?

T'Chall: I am not king of all people. I am king of Wakanda. And it is my responsibility to make sure our people are safe and that vibranium does not fall into hands of a person like you.

ここではティ・チャラとキルモンガーの「同胞」の捉え方の違いの大きな差が表れている。ティ・チャラが考える「同胞」とはあくまでワカンダ人だけであるのに対し、キルモンガ

[4] 引用文の下線部は全て筆者による

ーにとっての「同胞」とは「世界中にいる 20 億人の、自分たちと同じ肌の色の者たち」なのである。帝国主義によって植民化された「他者たち」は、キルモンガーにとっては「同胞」であっても、ティ・チャラにとってはそうではない。Délice Williams は、このキルモンガーという登場人物が『ブラックパンサー』における唯一の“Black Character”であるとし、以下のように続けている。

> His is the historically aware and historically burdened diasporic consciousness that assumes a necessary allegiance between Wakanda and the 2 billion other people in the world who, as Killmonger says, “look like them.” [⋯] This historical consciousness, this awareness of the imagined community of the Black diaspora, is what Wakanda needs from him in order to expand its ethical vision. [⋯] Wakandans cannot be Black without someone to articulate the claim that they are part of a larger community. [⋯] Wakanda is a fortress that defends against history. Kill monger breaks in on that fortress to assert his claim ― Black people’s claim ― to kinship. (28)

ワカンダは植民地化などの歴史から身を守ってきた国であったため、キルモンガーが抱いているような“Black diaspora”としての“consciousness”や“awareness”は持ちようがなかった。キルモンガーはワカンダへの外からの「侵入者」であると同時に、“Blackness”の「代弁者」でもあったのだ。物語終盤でティ・チャラとキルモンガーは国の在り方をかけて争い、最終的にティ・チャラが勝利する。ティ・チャラは致命傷を負ったキルモンガーに治療を申し出るが、それに対する彼の最期の台詞は“Why? So you can just lock me up? Nah. Just bury me in the ocean… with my ancestors that jumped from the ships. ‘Cause they knew death was better than bondage.” [01:57:45-01:58:05]であった。監督ライアン・クーグラーはこの台詞は脚本の第一稿からあったもので、この台詞から物語を作っていこうと考えたとインタビュー[5]で答えている。この台詞こそが『ブラックパンサー』の核であり、この監督の発言や、最初のオークランドの描写などから、エリック・キルモンガーという存在がいかにこの映画において重要であったかがわかる。

キルモンガーとの最後の戦いを制し、ティ・チャラは父や先代の王たちが隠してきたワカンダの資源と技術を世界に向けて開放することを決意する。そして、ウィーンで行われた国際連合で、彼は以下のようにスピーチをする。

> Scene: [02:05:23-02:06:26]
> My name is King T’Challa, son of King T’Chaka. I am the sovereign ruler of the nation of Wakanda. And for the first time in our history, we will be sharing our knowledge and resources with the outside world. Wakanda will no longer watch from the shadows. We cannot. We must not.

[5] 稲垣貴俊「『ブラックパンサー』キルモンガー最後の言葉、マーベル社長が死守していた ―「これまでで最も優れたセリフだと思った」」https://theriver.jp/bp-last-line-feige/

> We will work to be an example of how we as brothers and sisters on this earth should treat each other. Now, more than ever the illusion of division threaten our very existence. We all know the truth. More connects us than separates us. But in times of crisis, the wise build bridges while the foolish build barriers. We must find a way to look after one another as if we were one single tribe.

「賢者は橋をかけ、愚者は壁をつくる。人類が一つの民族であるように、お互いを慈しみ合おう。」というのがティ・チャラの出した結論であった。このティ・チャラの、「壁をつくるのではなく、世界のあらゆる人たちにも手を差し伸べ、富を分かち合おう」という言葉は、今まさにメキシコとアメリカの間に国境の壁を作ろうとしている合衆国大統領ドナルド・トランプに向けている言葉とも捉えることが出来るだろう。

ワカンダは、橋をかける方を選択した。主演のティ・チャラ役を演じたチャドウィック・ボーズマンは、インタビュー[6]で、「自分は成し遂げたいことのために劇的な行動を起こせるという自覚を持っていなければならない。そうすれば危機に直面したときにどう対処すればいいのかが分かる。手助けする人たちもいるだろうが、そこにある困難を処理する人間は君でなくてはならない。君を助け出してくれるデウス・エクス・マキーナは現れない。」と語っている。また、「橋」に関して、フランツ・ファノンの「橋は空から降って湧くものであってはならない。社会の全景にデウス・エクス・マキーナによって押し付けられるものであってはならない。[…] 市民は橋をわがものにせねばならない。このときはじめて、いっさいが可能となるのである。」(193) という有名な一節がある。世界で社会現象ともなった『ブラックパンサー』は、すでに同監督での続編の製作が決定している。これまで世界状況に見てみぬふりを続けてきたワカンダが、資源と技術を世界に向けて開放した結果、今後ワカンダと世界の関係性はどうなっていくのだろうか。

引用参考文献

Eckhardt, Giana M. "Black Panther: Thrills, Postcolonial Discourse, and Blacktopia," *Markets, Globalization & Development Review*, vol. 3, no. 2, article 6, 2018.
https://digitalcommons.uri.edu/mgdr/vol3/iss2/6https://digitalcommons.uri.edu/mgdr/vol3/iss2/6 (accessed April 30, 2019)

Jefferson, Marshall. "The Role of Colonialism in Marvel's Black Panther: An Essay", March 3, 2019.
https://finessesports.net/2019/03/03/the-role-of-colonialism-in-marvels-black-panther-an-essay/ (accessed April 30, 2019)

Williams, Délice. "Three theses about *Black Panther*." *Africology: The Journal of Pan Africa Studies,*

[6] https://www.youtube.com/watch?v=YqxL04IvNrc

vol.11, no.9, August, 2018.
http://www.jpanafrican.org/docs/vol11no9/11.9-special-5-Williams.pdf　(accessed April 30, 2019).
アッシュクロフト、ビル．グリフィス、ガレス．ティフン、ヘレン『ポストコロニアル辞典』、木村公一編訳、南雲堂、2008 年.
クーグラー、ライアン（監督）（脚本）『ブラックパンサー』[DVD]、日本：ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン、2018.
てらさわホーク『マーベル映画究極批評　アベンジャーズはいかにして世界を征服したのか？』、イーストプレス、2019 年.
バーバ、ホミ、K『文化の場所　ポストコロニアリズムの位相』、本橋哲也、正木恒夫、外岡尚美、阪本留美訳、法政大学出版局、2005 年.
ハドリン、レジナルド（作）、ロミータＪｒ、ジョン（画）『ブラックパンサー　暁の黒豹』、中沢俊介訳、小学館集英社、2016 年.
ファノン、フランツ『地に呪われたる者』、鈴木道彦、浦野依子訳、みすず書房、1996 年.